

---

# ぶりーちがくぱろ しょーとしょーと

Melody

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぶりーちがくぱり しょーとしょーと

### 【ZPDF】

N6187W

### 【作者名】

Melody

### 【あらすじ】

短編小説を連載していくことをおもっています。

作者の趣味と気分により各話のテイストがかなり変わるとおもいます。

## おえおえ

この作品は名前の通り  
ブリー・チの学バロの小説を書いてみよー！  
といつもです。。

学バロいいですよね学バロ。  
大好きですよ学バロ。

季節とかはあんま気にしません。  
というか気をつけられるほどの能力をもってないです。  
短編集確定ですねw  
氣のむいたときに更新します

文才ないのですが、連載の中で矛盾することがないようになります。  
できれば伏線とかはりたいです。  
まあ簡単なものしかひけませんが(、へ、・)  
もしかしたら小豆さんとコラボがあるかも・・・です！  
色々な人とできるようになつたら楽しそうですね。

まえおき（後書き）

200文字詰めるの大変でした（笑）  
前置きですから。。。

「ひつがつやくさりおはよー...」  
「...離森か。はよ」

高2の始業式。

俺に駆け寄ってきた離森は、俺の幼馴染。  
俺は離森が好きだ。小さじから...ずっと。

「クラス発表の紙、みた?」

「ああ。あそいで配つてるだ」

「行つてくるー。ちよつと待つてー。」

そう言つて離森は走り出した。

俺は、離森が俺と同じクラスだとつけると確認すると直ぐにしまつた、その紙を取り出す。

俺は離森に告白しそうなんといふことは考えたことがない。  
してもしなくとも、俺にひとつ、離森が大事な奴だつてことは変わらない。

\* \* \* \* \*

「へつねつめくさりおはよー...」

「おー井上。はよー」

高2の始業式。

あたしはいつも通り、黒崎くんに挨拶をした。  
あたしは、「おはよー」って言つのが好き。だって、そのとせだけは、友達がたくさんいる黒崎くんを、独り占めできるから。

黒崎くんが好き。あたしの、初恋。

黒崎くんはすぐ恋次くんたちに囲まれてしまつた。

「おはよ、織姫」

「あ、たつきちゃん。おはよー!」

たつきちゃんはあたしの大好きな、いちばんの親友。

「クラスの紙、みた? 一護も織姫もあたしも、同じクラスだつたよ」

「ほんと? 嬉しいなあ」

黒崎くんもたつきちゃんも一緒になんて。

「結局、去年は告白しなかつたんだよね」

「いやー、それは、ほら…ね?」

「もー。」

あ、そこそこええ、わざと織姫が一護に言つてたのと同じタイミングで『おはよー!』って言つてた女の子がいたんだよ。えつと…ほらあの子あの子。ほんとピッタリだつたから驚いちゃつたんだけど、あの子、知つてる?」

ねえ、ちゅうと氣になるよね?

しゃべりかわ（後書き）

短くてすみません；

雑森の「田畠谷くん」と織姫の「黒崎くん」が似てるなあつていうのを使いたかつただけなんです。笑

## ♪うわーぐ 1 (前書き)

—護Sideです( ^ 0 ^ )／  
よひしければ♪うわーぐ 2と合わせて読んでください

\* \* \* \* \*

あれは、去年の終業式。

「なあ、話つてなんだ？」

俺は、この高校で知り合い仲良くなつた朽木ルキアに呼び出されて、ふたりで人気のない静かな昇降口にいた。  
俺たちは、黒崎と朽木で、出席番号が前後。サバサバしているルキアは付き合いやすくて、自然と仲良くなつた。  
そして自然に、俺はルキアが好きになつた。

呼び出したルキアの頬がほんのり赤くなつていて、いつもとは違つてて、いかにも「勇気を出して、言いに来ました」みたいな感じで  
。 。  
。 。

それで、俺は、ちょっと期待していたんだ。  
好きな女子に呼び出されるなんて。

「おーい、ビーして黙つてんだよ、なんか言えよ」  
少しだけいつもよりはやい胸の鼓動をこまかすように、俺は軽く言った。

「…あのー、その、だな…」  
ルキアは言い辛そうにモジモジしていた。  
そんなルキアに、また強く胸が脈打つ。

「一護は、その……。恋次と、仲がいいだろう？」

恋次に…好きな奴がいるとか、聞いたことはないか？」  
顔を赤らめて、俺に問うルキア。

「…知らない」

俺は面食らつて、焦つて、胸にたまっていた息を全部吐き出してから、こたえた。

「好きなタイプとかは？」

「知らない」

…うそだろ？

「好きな芸能人とか、そういうのでもいいんだが……」

…なに思い上がってたんだ、俺……。

「知らない」

そうだ…。恋次とルキアは、幼馴染だつて、前に恋次から聞いて。

「そうか…」

うつむくるルキアを見て、俺の胸はチクツと痛んだ。

それで、あのときも、今みたいに、胸が痛くなつたんだ。

身体が震える。喉の奥がかわぐ。  
なにか言おうと思つのに、声が出てこない。

「たぶん、いねえよ」

突然、俺の口から、優しく声が響いて、俺は驚いた。

「恋次が女子も男子も関係ねえつて奴なのは、お前もわかつてんだ  
ろ」

「こんなこと、直つもつねえのに。

「たしかに、そうだが…」

そんな顔してねえで、元気だせよ。そんな表情になる恋なんて、捨てちまえ。

「それに、ルキアは女子だと一番仲いいと思ひぜ。気持ち、伝えてみりやいいんじゃねーの?」

自分は伝えてないのに。

「俺、呼んでくるからよ」

今すぐこの場から、逃げ出したいだけなのに。

「いや、構わん」

ルキアは首を横に振った。

「来年はクラスも別になつちまつかもだる。最後のチャンスじやねえか」

そんなルキアに、俺はまだ説得を続ける。

なんで、こんなに必死に、恋次とルキアの仲を応援してるのは、わからなかつた。

「いや…実は恋次と私は幼馴染でな。兄様と恋次も面識があつて」

「そんなこと、とっくに知つてる。

「そつか

幼馴染つてだけでも、恋次が羨ましかつたのに。

「ああ」

ルキアは吹つ切れたようにサッパリした顔をすると、顔をあげた。  
「好きな奴がいると聞いたら、諦めがつくかもしれんと思つただけなのだ。

やつぱり、兄様に知れたりしても困るしな

そう言つたルキアは、やつぱり少し寂しそうだつた。

「そんな顔するなよ」

そんな顔するなつて？ それはお前だろ。

「ありがとな、一護

……。

ありがとう、か。

ルキアの役にたてたのか、俺は。  
それなら、いいのかかもしれない。  
教室へ戻つていくるルキアの小さな背中を見ながら、そんなことを思つた。

## ふわふわーぐ 2 (前書き)

織姫Sideです( ^ 0 ^ )／  
よひしければふわふわーぐ 1と合わせて読んでください

\* \* \* \* \*

黒崎くんが、好き。

だけど、黒崎くんは、朽木さんが好き。  
去年の終業式、あたしは見てしまった。

いつもみたいに「おはよひ」って黒崎くんに挨拶して、  
いつもみたいに「おう、おはよ」って黒崎くんに返してもらつて、  
それで、今日も挨拶できた、笑顔の黒崎くんが見れた、って喜んで  
た。

来年クラスが変わっちゃつても、挨拶できるかなつて不安はあつた  
けど、それも黒崎くんの笑顔で吹つ飛んでしまつた。

終業式の行われる体育館に移動するとき、黒崎くんがちょっとソワ  
ソワしてゐるのに気付いた。

終業式だから、ちょっと寂しいのかなつて思つて、あたしと来年も  
一緒にクラスがいいつて少しでも思つてくれてたりしないかなつて  
淡い期待を抱いた。

黒崎くんと同じクラスが、今日で終わりにはなりませんよ

。つい

\* \* \* \* \*

終業式が終わつて、教室に戻つてクラスのみんなと寄せ書きしよう  
と思つていたら、黒崎くんと朽木さんが教室に戻る階段を上らない

で昇降口の方に行くのがわかつた。

朽木さんは、背は小さいのにキリッとしててカッコよくて、大人びてて、大好きな友達。

黒崎くんとも仲がいい朽木さんと一緒に、黒崎くんと少ししゃべりできないかな？

そう思つて、近づいたら、黒崎くんの声が聞こえた。

「なあ、話つてなんだ？」

はなし？ 朽木さんが黒崎くんを呼んだのかな。ちょっとふたりの間に行くのが躊躇われて、足を止めた。

「おーい、どーして黙つてんだよ、なんか言えよ」

「…あのー、その、だな…」

朽木さんが言い出しへくそつだつたから、あたしは思わず壁に身を隠してしまつた。

聞いちやいけない話なのかもしれない。

じゃあ、聞き耳をたてても、いけないんじゃないの？

そう思つたけど、動けなかつた。

「一護は、そのー……。恋次と、仲がいいだろ？」

恋次に…好きな奴がいるとか、聞いたことはないか？」

朽木さんは、恋次くんが好きなのかな。

やっぱり、聞かないほうが良かつたかもしれない。

あたしはその場を離れようとした。

「…知らない」

けど、黒崎くんの声がすゞく暗くて、心配してしまつた。

「好きなタイプとかは？」

「知らない」

「好きな芸能人とか、そういうのでもいいんだが……」

「知らない」

質問を繰り返す朽木さんに、黒崎くんは「知らない」と答え続ける。  
もしかして、黒崎くんは、朽木さんが好きなの…？

「そうか…」

質問をやめた朽木さんの声も、悲しそうだった。

「たぶん、いねえよ。

恋次が女子も男子も関係ねえって奴なのは、お前もわかつてんだ  
ろ」

人のいない昇降口に、優しい、あたしの大好きな、黒崎くんの声が、  
響く。

「たしかに、そうだが…」

「それに、ルキアは女子だと一番仲いいと思つぜ。  
気持ち、伝えてみりやいいんじゃねーの？」

俺、呼んでくるからよ

黒崎くん、励ましてるの？

黒崎くんの口から出てくる言葉が、ちょっと信じられなくて、あた  
しは驚いた。

「いや、構わん」

「来年はクラスも別になっちゃつかもだろ。最後のチャンスじゃね  
えか」

黒崎くんは告白を勧める。

黒崎くんが、朽木さんを好きなのかも、なんて、勘違いだつたんじ  
やないかな。

「いや…実は恋次と私は幼馴染でな。兄様と恋次も面識があつて」  
あたしはまた驚いた。

そうだったんだ。たしかに、朽木さんと恋次くんは仲良しだと思つ

てたけど。

「そつか」

「ああ」

「好きな奴がいると聞いたら、諦めがつくかもしけんと思つただけなのだ。

やつぱり、兄様に知れたりしても困るしな  
それじや、たしかに、告白は無理かもしれない。  
でも、黒崎くんが、告白を勧めているの…。  
心の中がモヤモヤする。

「そんな顔するなよ。ありがとな、一護」

やつぱり、黒崎くんは悲しんでるんだ。  
それを、朽木さんのために、かくして、押し殺して。

やめて。ふたりとも、傷つかないで。  
大好きな人たちが、大好きな人たちによつて、傷ついていく。  
でも…あたしに、できることなんてないんだ。

あたしが、朽木さんだったら。

朽木さんに、なりたい。

黒崎くんを励ましたい。だけど、黒崎くんは、あたしがここにいることを知らない。

朽木さんを励ました黒崎くんに、声をかけたい。

そつと黒崎くんの方を向く。

「黒崎くーん！ 教室にいなかつたから、探しちゃつた。  
ねえ、教室に行つて、寄せ書き書いてくれない？」

あたし、黒崎くんの言葉が欲しいな。

あたしには、黒崎くんが、必要な。

「…井上」

黒崎くんは眼を見開きあたしを見る。

「ねつ。みんな、待ってるよ」

あたしはつとめて明るい声を出す。

…つまく、笑てる?

黒崎くんは、元気をだしてくれる?

「…ああ、そうだな」

黒崎くんが微笑む。

「井上、行こ」

「…うん!」

嬉しい。黒崎くんがまた、笑ってくれた。

\* \* \* \* \*

階段を上の黒崎くんの隣を少し遅れて付いて行く。

あたしはここの近くにいるのに、黒崎くんはあたしを見てない。  
朽木さんはここにはいないのに、いま、黒崎くんの心の中にいるのは、朽木さんなんだ。

黒崎くんの横顔を、こんなに近くで見たのは、初めて。

近くにいるほど黒崎くんを想う気持ちは強くなつて、強く想ひほど黒崎くんを遠く感じて、辛くなる。

そのとおり、

「ん? 元気ないな、井上、どうかしたか?」

ふいに黒崎くんに声をかけられて、瞳に涙がこみ上げてきた。  
とつさに欠伸のふりをして、「ね、寝不足かなつ。気にしないで」  
つて誤魔化した。

「そつか、ならいいんだ。なんかあつたら言えよ。友達なんだから」

「…ありがとう」

黒崎くんが、あたしの心配をしてくれたのは、嬉しかった。  
けど、こんなに近くで見つめてても、ただの友達なんだ。  
そんな事実を痛感した。

## ふるわーぐ 2（後書き）

織姫好きです、可愛いから。

髪型は真似してますが色はちょっと無理です…。（（ビードモ））  
そんなわけで、織姫はストーカーじゃないです、はい。

可愛いし健気だからいいんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6187w/>

---

ぶりーちがくぱろ しょーとしょーと

2011年12月19日16時48分発行